

# ヴァチカン：内部対立が表面化

大ローマ布教所長  
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

現法王ベネディクト 16 世は 4 月の誕生日を迎えると満 85 歳になる。そして法王に選出されてから、7 年が過ぎようとしている。選出された時、既に高齢になっていた法王は、口外はされなかったが、そんなに長くは生きないだろうと、心中思っていた高位聖職者がかなりいたようだ。

昨年 11 月半ばより、「現法王はそんなに長く生き延びないで、2012 年中には死ぬだろう」という噂が広がった。これは自然死を意味するのか、暗殺を示唆しているのかよく分からない。こういう噂が出るということは次期法王の選出問題が絡んでいるようだ。現法王はドイツ人だ。前ローマ法王はポーランド人だった。265 代の法王が続く長い歴史の中で、イタリア人以外の法王は非常に少ない。その中であって、今は、2 代続いてイタリア人以外の外国人法王なのだ。それ故に、次期法王になりたい枢機卿はイタリア人の中にたくさんいると考えられる。もちろん自分が次期法王になるのだと公言する枢機卿はいない。

最近になって、ヴァチカンの内部の情報が、故意に外部に流され、メディアに利用されているようだ。

まずは、2011 年 5 月 27 日にダリオ・カストリヨン・ホヨス大司教が「ヴァチカン内部に各種の墮落を矯正しようとする動きがある」ことを国務長官タルチズィオ・ベルトーネに手紙に書いて送ったこと。

2 番目に、財政の透明化について。昨年 4 月に法令化されたが、実施されたのは 2012 年 1 月 31 日からである。過去に遡って効力を発揮していないということ。

3 番目は、ヴァチカンのイタリアの銀行にプールしていた約 180 億円を銀行からのコントロールを避けるためにドイツの銀行に振り替えたことである。

さらに、大きな話題を挙げよう。

2 月 11 日に発行された新聞『FATTO QUOTIDIANO』（日常の出来事）は、「反法王の謀反がある。法王はこれから 12 カ月以内に死ぬか、精神錯乱状態に陥るだろう」と報じた。それを示すものが、2011 年 11 月に北京を訪問したシチリア・パレルモの大司教パオロ・ロメオの話の内容だ。そして、現ローマ法王は内密に自分の後継者選びをしていて、枢機卿で、現ミラノの大司教（スコラ）を選んでいているという。さらに、法王は国務長官ベルトーネを憎んでいて、彼を交代させようとしていると述べたようである。

当の大司教は、そんなことは話していないと否定しているし、北京への旅行は純粋に私的なもので他意はないとコメントしている。

国務長官ベルトーネは反法王派の筆頭格であると見られている。彼に付き従うのはドメニコ・カルカンニョ、ジュゼッペ・ヴェルサルディ、ジュゼッペ・ベルテッロなどの枢機卿である。イタリア・カソリック界における長年の大抗争は、法王庁を弱めるものであって、カソリック界を宥めるものではない。だから、ベルトーネ長官の動きに反対するイタリア人枢機卿も多い。彼に対する批判で多いものは、国務長官の役割を根本的に変革したことである。つまり、国務長官の役割を「副法王」のそれに変えたのである。このことは先代の法王ヨハネ・パオロ 2 世が、

後年病にかかっていた時の国務長官アンジェロ・ソダーノの立場によく似ている。ベルトーネ派の人はベルトーネが現法王の後継者であると考えている。しかし、彼の反対派は、今までのヴァチカンの国務長官としては最低の一人であり、その上田舎者であって、カソリック教会の品位・品格を落としているという。そのベルトーネは、ヴァチカンを揺るがせたドキュメントの流出問題があっても平静を保っている。ヴァチカン内部では「カラス」というよりも「お先棒担ぎ」として話されている。また、ミサを司ったり、ミサにあずかたりする勇気を持っていることに驚いているという。

ヴァチカンの「年鑑」を見てみよう。1962 年から 1964 年の第 2 ヴァチカン公会議の頃に比べれば、ページ数にして 3 倍に増えている。官僚主義の増大は進むばかりである。それ故にいろいろな機構が増え、勤労者がふえ、責任感も増している。しかし、人的資源は減少傾向にある。多くの人はより高い位置を求めるが故に、現在の地位に満足していない。これはヴァチカンの内部でも同じことだ。

ヴァチカンは現在、2012 年の「復活祭」を控えて 4 旬節に入っている。しかし、この時点での雰囲気はあまりよくないようだ。『FATTO QUOTIDIANO』によってすっぱ抜かれた記事の内容に、皆疑心暗鬼になっている。

現法王の擁護者の意見を記そう。

ドイツ人の枢機卿で 78 歳になるヴァルテル・カスベルは、現在生存中の第一級の神学者である。現法王が著した『ナザレのイエス』の本の中にも登場する数少ない一人である。彼と法王ベネディクト 16 世は 40 年来の旧知の仲である。互いの論説を尊重し、尊敬し合っている。彼は本年イタリアで『カソリック教会、その本質、現実、ミッション』（発行元：クエリニアナ、Queriniana）を発行した。その著書の中で彼は「教会の将来」について語っている。「新しい出発は、第 2 ヴァチカン公会議を齎したような動きの中でのみできるのだ。それは 3 つのことながら一緒になっている。第 1 は本源より栄養素をもらった精神性の革新、第 2 は強固な神学的熟考、そして、第 3 は伝道の精神である。」「ヴァチカンに現法王追放の動きがあることは法王に申し訳ない。彼にとって悲しいことだ。」「私はヴァチカン内に権力争いがあるのを知らない。」「これは逆に国務長官やその側近を懲らしめるためかもしれない。」「ともあれ、一人ひとりがその責任者であることは間違いない。」「現法王は枢機卿で、教義省長官の時代、ヴァチカンの内部の動きに巻き込まれることなく、自分の職務を忠実にこなして来た。」「この問題は内部の官僚主義に起因しているだろう。」「国務長官を、あるいはその一派を批判したければ、すればよし。しかし、その時には論点を明確にすること、直接の対話者に客観性を示すこと、法王にも明瞭に話すこと。」「何か言いたいことがあれば、自分の責任を明確にすること。」「何か不穏な動きがあつたら、国務長官に知らせるのは義務だ。」「しかし、このドキュメントをメディアに流した者がいることは非常に残念だし、失望している。」

こんな動きがある時に、法王の心境はいかがなものだろうか。

(11 頁へ続く)